
僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

【Nコード】

N0980BA

【作者名】

まり

【あらすじ】

工藤愛子は独りだった 一年の終わりに転校してきた愛子は、教室空気に耐えられず屋上へいきお弁当を食べることに そしていざ食べようとする と突然、屋上の扉が開いた
そこで初めて僕の恋は始まった

出会い（前書き）

二作目です

明久×オリ予定が愛子に

別に愛子は好きだからこれでいいですけどね

それではどうぞ

出会い

その出会いは突然で、だけど優しく、嬉しくて、僕の初恋になったんだ。

ホントに好きになって毎日気付けば彼のことはかり考えていたよ。その時あったことは、別にたいしたことないんだけどね。

いまはそんな彼と結婚して幸せな家庭を築いている。ちょっと忘leenぼうだけだね。でもそれがまたいいんだ。

「いってきまーす」

「いってらっしゃい あつまたお弁当忘れてる」

「あれ？ ホントだ いつもゴメンね」

「いいよ 夫婦だしそれくらい」

「じゃあ改めていってきます」

「えー いってきますのキスは？」

「なっ／／／／／ ……わかったよ（ちゅっ）」

「えへへ／／／／／」

「じゃあいってきます、愛子」

「いってらっしゃい、明久」

そう僕はバカで有名だった吉井明久と結婚しました。
このお話は僕たちが結婚するまで、どんなことがあったか工藤愛子
改め吉井愛子視点の話です。

出会い

「工藤愛子です　もう一年の終わりだけどよろしくね」

僕は文月学園っていう不思議な制度をもった学校へ転校してきた。
試験召喚制度ってよくわからないやつ。二年生になってから使うらしいんだ。

でも僕は今一番友達が欲しい。だって何もできないもん。一年の最後だけあって皆、仲のよい友達がいる。

ハッキリ言って羨ましい。多分、数日間は誰からも話しかけられないからなあ。

まあ半日経った時、つまりお昼の時間。友達がない僕は独りで弁当を食べることになる。皆は机をくつつけあって食べていた。

「（僕一人だけ浮いてるよね……）」

結局、空気に耐えられなくなって僕は屋上で食べることにした。

キィ

屋上の扉を開けると広くて青い空が視界を覆った。とても晴れやかな気持ちになる。

僕はベンチに座り独りお弁当を――

「あれ？ 先客がいる？」

――食べようとしたら誰かがきた。どこにでもいそうな普通の子、でも顔は少し可愛い？ かもしれない

「君、初めて見るけど転校生？」

「うん 工藤愛子です よろしく」

「一人ってことは……僕と一緒に弁当食べる？」

「えっ……」

なんで？ なんでイキナリそんなこと言うのさ。

「僕の名前は吉井明久 よろしくね工藤さん」

「……………」

突然のことに反応できなかった。

なんで？

なんで？

なんで？

なんで初対面の僕を誘ってくれたの？

ツウ

涙がでた。

「えええ！？ なっなんで泣くの！？」

わからない。なんでかしらないけど涙がでたんだもん。別に悲しくはないよ。だってー

「嬉しい 嬉しいよ吉井君」

ギユウ

衝動に駆られて吉井君に抱きついた。

「わわっ ちょっと抱きつくのはー」

「お願い もう少しだけこのままでいさせて」

僕はいま泣いている。嬉涙を流している。ホントは今すぐに一緒にお弁当食べたいのに泣いた顔を見て欲しくない。

僕の体は震えていた

「……わかったよ　いつまでも待つよ」

吉井君はそう言って優しく僕を抱いてくれた。吉井君の体温が直に伝わってすごく暖かい。それですごく落ち着く。

僕はそれから長い間吉井君に抱きついたままだった。

ドキドキドキドキドキドキ

胸が高鳴っている。ちょっと苦しい。

これが恋かな？

こうして僕の初恋が始まった

別れ（前書き）

明久の過去が少しです

それではどーぞー

別れ

しばらくして僕は泣きやんだ。でも顔をあげることはできなかった。だって男の子の胸で泣いたんだよ？

恥ずかしいし、泣いてたから目がきつと赤くなってるもん。それにもっと吉井君の体温を感じたい。

「泣きやんだみたいだね？　ならそろそろ……」

「……うん」

無情にも吉井君の方から言ってきた。まあしかたないよね。いつまでも抱きつかれたら嫌だろうし。そう思って僕は吉井君から離れた。

「大丈夫？」

「うん　ありがとう」

「じゃあお弁当食べよっか」

「……うん」

僕たちはお弁当を食べ始めた。だけどお互い話すこともなく、ただ時間だけが過ぎていく。何か話さないと。

「ごっゴメンね吉井君」

「ムグムグ 何が？」

「僕につき合わされてお弁当食べるなんて嫌でしょ？」

「ゴクン 別に むしろ……何でもない」

吉井君はそこで話を切ってしまった。また時間だけが過ぎていく。
えっ？えっ？どうすればいいの？

「……明日も一緒に食べる？」

「えっ……？」

「いついま何て？」

「また一緒に食べてくれるの？」

「嫌ならいいよ 早くクラスに馴染まないといけないからね」

「ぼっ僕は大丈夫 でも吉井君は？」

僕につき合わされるなんて迷惑に決まってるよ。吉井君にだって友達はあるだろうし。

「また僕と一緒に食べなんてしなくてもいいんだよ？」

「僕も大丈夫 少なくとも工藤さんが友達を見つかるまでは毎日でも一緒にやるよ」

「……ありがとう」

あつまた泣きそうになってきた。吉井君はズルイよ。僕にとって嬉

しい言葉でしか言わないんだもん。
こんな吉井君はきつとモテるんだろうな。

「ねえ吉井君 吉井君には彼女っているの？」

「ほえ？」

うわあああ／＼／＼／＼

なんてこと聞いているの僕！？これじゃまるで吉井君に気があるって
言ってるようなもんだよ。

ううう恥ずかしい……

「彼女？ いないけどどうしてそんなこと聞くの？」

「えっと そのー 興味本意？」

「ふーん」

ふうなんとかバレなかったかな？でもバレてて何も言わないのかも
しれない。

うーん。どっちかな。

キーンコーンカーンコーン

「あっもうクラスに戻らなきゃ」

えっもう？早いよ。

「じゃあね工藤さん またー」

口にしなきゃならない気がした。

「あの時の僕と工藤さんを重ねているのかな？」

僕も昔、転校してきて同じことを味わった。だから工藤さんの気持ちにはよくわかる。

寂しくて。

悲しくて。

誰かに助けて欲しくて。

「工藤さんは僕が助けたのか……」

僕も助けてもらった。その子とは友達になっていつも一緒にいた。中学の卒業の時に別れちゃったけど、いまでも大事に思ってる。

でもそれは一年以上一緒にいたからであって、もうすぐ一年が終わり二年生になる。その時に振り分け試験があるけど多分同じクラスにならない。

「だからって助けない訳にはいかない」

辛い別れになれそうだな。

そう思うと胸がキュウと締め付けられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980ba/>

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

2012年1月2日21時50分発行